

就職と人生を成功させる大学教育

—並みの素材を有為の人材に変える教育—

石川 公洋

はじめに

現在の社会情勢を見てみると、長く続く不況により、株安、リストラによる失業者の増加、銀行などの基幹産業の崩壊、自殺や犯罪の増加など生活不安が大きく広がっている。大学を卒業しても職がない。それで、フリーターが卒業生の過半数を占め、大きな社会問題になっている。文部科学省は2003年4月23日までに、起業家教育や就業体験教育などに取り組む高校「学力向上フロンティア校」を39都道府県合わせて、計337校指定すると発表した。日経新聞によると、地元商店街の協力を得て空き店舗を利用した販売実習など就業体験教育を展開する高校も出てきている。私は大学生にこそ、この「起業家教育と就業体験教育」が必要であると考え。この論文では現代の大学生に蔓延する無気力、声小さい発言しない等の活気のなさを排除して、高い志をもち、ハングリー精神旺盛な若者たちに育てるにはどういう教育が必要なのか、企業が地域社会が期待する人材教育とは何かという観点から大学教育を論じている。

1. 大学生のキャンパス実態

授業やキャンパスにおける大学生たちの姿を観察しているとわかることがある。何かに一生懸命に打ち込む学生たちが少なくなったように思う。情熱が乏しく、無気力で自己主張できない若者たちがとても多い。中国・韓国などの留学生がもっているハングリー精神というか、積極性が足りないと思われる。多分アルバイトで時間が失われ、エネルギーを失い疲れてしまい、仲間たちと遊ぶともう、“何か将来役に立つ事をしよう”という時間も意欲もなくなってしまうのかも知れない。それでも、まだ夢があれば救いはある。夢を願望に終わらせず、目標に変える努力をすればいいのである。

次に、学生たちの就職への姿勢¹について考えてみる。世の中は不況である。企業の求人数は減少し、学生の県内志向も依然として根強い。更に、就職に取り組む姿勢も真剣ではない。厳しい就職情勢を反映して自己PRや売込み活動をする筈なのに、企業説明会には殆どの学生が行かない。これでは就職率がダウンするのは当たり前である。高い授業料を親は苦勞して払っているが、現状は大学卒業生の約50%はフリーターとなる。彼等はフリーターの“こわさ”が分かっていない。フリーターの経験は就職のときには全然役に立たない。それは社会の末端の3Kの仕事安い賃金でやるからである。仕事の流れも掴めず、誰でもできる仕事を機械的にするだけというケースが多い。勿論履歴書にも記載できず、時間を空費しただけとなる。そして、更に恐いの

は病気になっても健康保険が無いため、病院にも高くは行けない。失業保険ももらえないし、雇用促進の失業対策であるパソコン等の職業訓練の補助金もない。それでも20代なら体も元気があるからいいが、30代を過ぎると企業は若い人を望むので仕事探しは困難になる。また、結婚できたとしても子供を大学にやることはできない。最後は親に頼る事になるが、親もいつまでも生きているわけではない。フリーターの行く末は無業者かホームレスであり、大学に行ったのは何だったのかと後悔する事になる。

という訳で、大学教育で学生に教えなければならない大事なことの1つはフリーターになる損失と就職内定への“ノウハウ”であろう。就職内定が決まれば、本人はもとより親が助かり、大学の知名度が上がり、社会の活性化にもつながるのである。

2. 大学教育の盲点

学習意欲を失って授業についていけない学生たちが大学には確実に存在する。²それは全体の約1～2割位いるのではないかと推定できる。彼等は入学後早くて数ヶ月で意欲を失う。5月の連休が1つのやまと言われるが、まず授業を休みがちになる。アルバイトを始めだし、そのため自由時間が少なくなって、仲間と遊ぶ時間をとると、もう授業に出る時間の余裕がなくなってしまふ。バイトは遊ぶお金が入るので、そのときは有難いがその代償は大きい。生活のためや授業料支払いのための必要経費であるなら仕方ないが、殆どは学費や生活費でなく遊興費に消えてゆくので、「百害あって一利なし」である。この学生たちは講義に必要な出席日数が足りなくなり必然的に単位を落とすことになる。バイトを止めるか減らす決断力があればまだ救われるが、たいていはズルズルと4年間で過ぎてしまい、留年決定となり就職のチャンスも逃す事になる。最悪のケースになると、完全に授業に出てこなくなる。授業料は未払いでバイトに全力投球するので、これは遅かれ早かれ退学予備軍となる。こうなる前に救いの手立ては無いのだろうか。今の大学のシステムでは1年生向けの基礎ゼミやクラス担任のアドバイザー制などで、多少のケアというか生活相談的な予防措置は取れる。しかし、単位を落として学習意欲をなくしてしまった学生たちにまた、同じ授業内容を同じ先生が教えるシステムでは興味が湧かないのも無理はない。そこで、これらの学習意欲を失った学生向けに新しい履修モデルを提供し、彼等が敗者復活戦というか新鮮な気持で勉学できるカリキュラムについて考察しなければならない。次に、普通レベルの学生たちについて考えてみる。彼等は卒業時にフリーターにならないで、就職できるのだろうか。残念ながらその答えはYESとは言えない。それは、不況で求人数が減ったせいもあるが、学生たちに効果的な就職活動が出来ていないと考えられるからである。

最近の学生たちの就職活動を見ていると危なっかしくてしょうがない。成績もよく、部活でスポーツも頑張っているしっかりした学生なのに、履歴書を添削すると全然ダメである。誤字が多く、文章表現力がひどすぎる。更に、模擬面接をしてみるとこんな仕事をしてみたい、頑張りたいという熱意が伝わってこないのである。海外留学生たちがもっている Hungry Spirit は何処に行ったのか。つまり、社会にでるための“実学”部分がぬけているのである。これは『大学教育に盲点がある』と考えざるを得ない。いくら授業で高度な学問、難しい事を教えても消化吸收できなければ何にもならない。社会に出てからいつか役に立つ日がくるかも知れないが、出る前に挫折してしまうのでは実に残念である。就職活動をうまくやる方法を大学がカリキュラム等を工

夫して提供することが、本当に親身に学生を助けることになると思う。

3. 就職内定を成功させる要因

就職内定を勝ち取るにはいくつかの成功要因を知り、事前にその準備と対策を立てておくことが絶対に必要である。その要因と思われるものを考えてみる。まず、「実学」と「ビジネスマインド」の2つの要素を教育できれば就職で内定するのは容易であると考ええる。次に、具体的な就職を成功させる要因を述べる。

先ず成功要因の第1は、『即戦力の知識・経験（パソコン等）』である。第2はITや営業関連の『資格』が取得できれば自信につながる。第3に『体験学習』がある。これは企業実習とボランティア活動である。企業実習で初めて企業の実態に接するのである。もし、海外インターンシップなどが実現できればすばらしい。また、ボランティア活動により、人に優しくする喜びや助け合いの精神を学ぶことができる。第4は大学の『部活』である。学生時代に部活に全力投球した人はリーダーシップやチームの仲間との協調性を身につけることができるだろう。

第5は『ベンチャービジネス』の知識と起業家マインド育成を目的としたOJTである。これら5つの要因の習得を支援するカリキュラムを大学が提供できること。学生が目的をもって、これらの要因の習得に励むこと。この2つができれば即戦力の教育が実現して、就職内定率は大きくアップする。特に大事なのが3、4、5の要因である『体験学習』、『部活』、『ベンチャービジネス』である。それは最近、就職の採用状況が不況の影響で成績よりも人物重視に変わってきたのをみれば良く分かる。一生懸命に何かに打ち込んだ学生、先生や社会人と積極的に話す機会を作った学生たちは面接官が見ればすぐわかる。それは、自信に満ちた表情や話し方に現れ、社会に出て何をしたいかという目的意識がはっきりしているからである。

次に、忘れてならないのが、エントリーシート・履歴書の書き方と面接のテクニックである。いくら上記の成功要因を身につけても、履歴書の段階で落とされてしまえば何にもならない。そこで、履歴書とエントリーシートの書き方が重要になってくる。次に、面接の準備不足のため、自分のスキルやセールスポイントを面接官に伝えられなかったら不合格である。面接で実力を発揮できて、内定を勝ち取るための成功要因を以下に書いてみた。その要因は、面接においては『情報収集能力』と『コミュニケーション能力』である。情報収集は新聞・雑誌・インターネットを利用して行う。当然日経新聞を読み、インターネットから必要な情報を検索できなければならない。コミュニケーション能力はインターンシップなどで企業人と対話をしたり、ボランティア活動で人と話をする訓練が必要になる。これは、面接のときのQ&Aの傾向と対策と考えても良い。自己PRはコミュニケーション能力の重要な1つである。熱意と積極性をアピールして自分は何をしたいのか、何ができるのかを面接担当者に強く印象付けるのである。

ここで、見過ごしがちなのが、「面接官は最初の3分間で受験者を見抜く」³ということである。そこが分かっていると、面接で半数以上は実力があっても失敗してしまう。第1印象で多くを見抜かれてしまうからである。まず、人柄、常識度、就職意欲などは第1印象ですぐ見抜けるというアンケート調査がある。また、「姿勢」「表情」「視線」「話し方」「話の聞き方」「話の内容」も第1印象へ大きな影響力があるといわれる。ということは、面接直前に必死になって志望動機を暗記する学生が多いが、その前に第1印象で勝負がついているのである。学生の就職内定

の経過を見ていると、何度も企業の面接で失敗して経験を積むにつれ、場慣れというかある種の落ち着きが顔や態度に表れてくる。そうになると、当然、面接における第1印象が良くなってきて、いくつも企業に内定ということになる。見方を変えれば就職で悩み苦勞して、あきらめずに努力を続けることは自分を磨くことになる。これは大学の勉強に勝るとも劣らない人生修行の1つといえよう。

4. 特技を伸ばす教育と学習意欲を失った学生への対応

次に、これまでの大学教育でなかなかやれなかった、あるいはやっても効果が十分に出なかったものをあげて見ると、①『特技を伸ばす教育』と②『退学・留年をなくす教育』があると思う。①はどんな人でも必ず何か特技がある筈で、これを眠ったままにしないで発掘できるチャンスを与える授業を目指すようにする。もし、自分の特技を先生が見つかり伸ばしてくれたら、将来自分がやりたいことがはっきりしてくる。就職の面接では目的意識が明確であることは大変有利となる。最近「おとなしい学生が多く、何をしたいのか漠然としていて分からない」という面接官の声が聞こえてくる。これでは厳しい就職戦線を乗り切れない。②は学習意欲を失った学生たちをどう教育するかという問題である。即効薬はないが、面白そうだからやってみようという積極的な意欲をもたせる方法を模索しなければならない。その1つは体験学習であろう。ボランティア活動で養護施設などを訪問して老人や子供たち、知的障害者のお世話をすることで地域社会に貢献する事を学ぶことができる。次に、自分にあった企業でインターンシップを行い、仕事を覚え職場の人たちと一緒に働きながら労働の大切さを体験する。これらの体験学習を通して自信をつけ、世の中で人のために出来る事が山ほどある事を知る。また、職業教育を短期集中的に行い腕に技術をつけさせる。特技を見つけて資格を取る事を奨励するのもいい方法であろう。専門学校と提携して単位互換をするのも選択肢の1つかもしれない。

図1に特技を伸ばし、学習意欲を高める方法を大学教育の重点課題としてまとめた。課題の第1は“学習の動機づけ”を早い時期にやることである。これを勉強すればこんなに良い事があるということを彼等に教えてあげ、自分から“やりたい”という気を起こさせる。課題の第2は座学では得られない面白い、興味が湧く“体験学習”科目をカリキュラムに大幅に取り入れることである。これにより各人がもついろいろな特技・才能を発掘して伸ばすチャンスにできる。

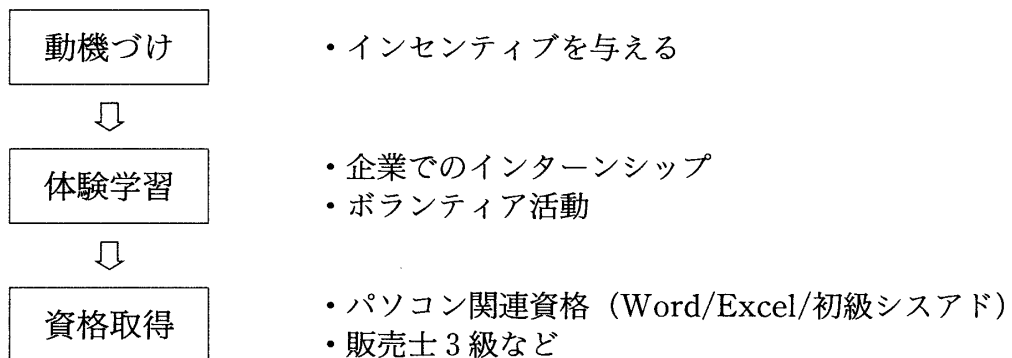


図1 大学教育の重点課題

例えば、

- ・企業でのインターンシップ

学生は仕事に対する心構えや社会人としてのマナーを学ぶことができる。とくに、就職時に有利な“企業実習”を一定期間経験する事は人生で大きな得になる。できれば、ベンチャービジネスの起業にいき、苦勞して貴重な体験を得るトレーニングができればすばらしいと考える。また、東南アジアなどでの海外インターンシップも大きな効果があると考えられる。特にビジネスにおいて重要な要素と考えられる「ハウレンソウ」、即ち報告・連絡・相談を実践で身につけるには、企業でのインターンシップや大学での部活が欠かせないと思う。

- ・ボランティア活動

老人ホームや知的障害児の養護施設でのボランティア活動を通して、地域社会に目を向け、助け合う優しさ、人間的な温かさを体験する。また、海外青年協力隊などの体験も単位として認め、これを奨励する。

課題の第3は自信をつけるため自分に向いている“資格”を取らせる。例えば、営業が好きなら販売士3級の資格を取るように奨励する。パソコンに興味をもったら、EXCEL、WORDの資格や初級シスアドの資格が取れるように短期集中トレーニングを行う。以上3つの課題を達成する授業が出来るようにカリキュラムを改良できれば、学生に学習意欲が出てきて退学者は減り、就職内定率もアップして大学の知名度も向上するであろう。次に、学習の動機づけを行い、即戦力の知識を習得させ、体験学習による“ビジネスマインド育成”を目的とした即戦力の人材教育について考えてみる。

5. 並みの素材を即戦力の人材に変える教育

“鉄は熱い内に打て”という、本当にそうである。バイトをやめ、1年生のうちに、パソコンでも何でもいい熱中できる何かを見つけることが大きな成果につながる。

大学1年になったときは瑞々しい感性と情熱がまだ失われていない。この短い貴重な時間を有効に使わなければ大きな損である。若いときは色々な可能性を皆がもっている。その“可能性”を見つけ、大きく伸ばす教育が大事である。

もし、並みの素材である学生を“即戦力の人材”に変えることができれば、就職内定は勿論、企業に入社してからも苦難にめげず、仕事を一生懸命にやるようになる。人からも期待され信頼されることになり、人生でも成功することができる。このような理想的な教育を可能にする要素は何であろうか。ここで「並みの素材である学生」を即戦力の人材に変える要素として、図2に示す3つの要素を考えてみた。

第1の要素は即戦力となるスキルをもつこと、これを「実学」という言葉で表した。第2は企業で必要な営業力や起業家マインドを「ビジネスマインド」で表した。第3の要素はどんな環境の変化にも対応できるサバイバル能力、人間の生き方について考える人生哲学とも云える修業体験を「人間力」という言葉で表した。これらの3つの要素を兼ね備えた人材教育ができれば、並みの学生を“有為の人材”に変えることができると考える。この人材教育は変化に強く、失敗を肥やしとして成長を続ける人材を育成する“自立型”の教育である。人に頼らず自分で問題を見

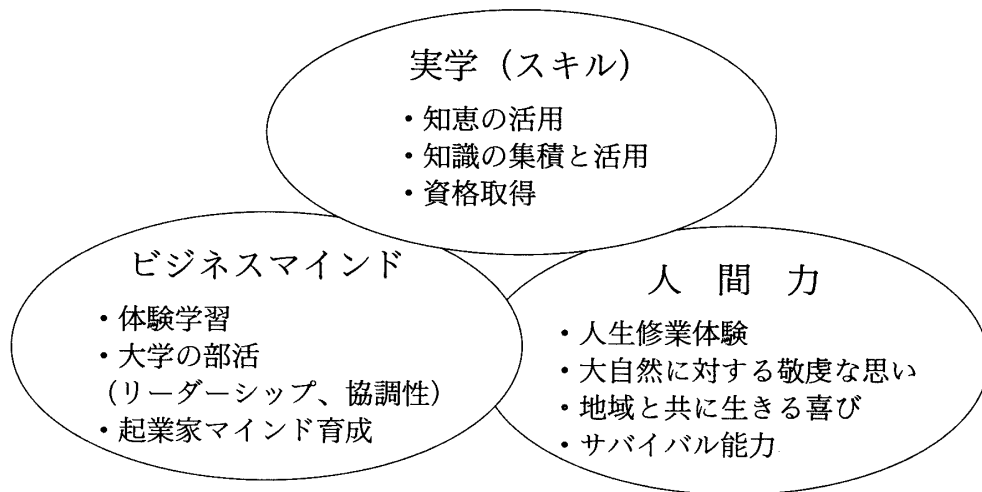


図2 並みの素材を即戦力の人材に変える教育

つけ解決法を考えて実行することができる人間を作る教育である。以下この各要素について、詳しくその内容を探っていくことにする。

1) 実学 (スキル)

簡単にいえば、即戦力となる技術 (スキル) を習得することである。例えば企業で活用できる資格をとること、IT活用能力を身につけることを指す。いくら知識があっても活用できなければ意味がない。そのために営業関連の知識を習得し、うまく仕事に活用する“知恵の活用”が重要となる。

2) ビジネスマインド

これは座学でなく体験学習によってのみ達成できると考える。大学生活4年間で、同レベルの仲間たちだけと話をするだけでは成長する事はできない。やはり、社会人である経験豊かな大人たちと話をすることで、考え方が大きく成長するのである。外の世界との接触が彼らを変化させ、成長させるのである。これは日本の歴史でも鎖国から黒船による開国によって、国が大きく発展した事からもよくわかる。大学は積極的な社会参加を奨励し、他大学、地域住民、企業経営者などとの対話ができる機会を提供しなければならない。各種の体験学習により、外の世界の人たちと話をする機会が大きく彼等を成長させる筈である。様々な環境の人との対話の例として次のものがある。

- ・ 社会人との対話の必要性 (大人と話ができる)
- ・ 国際交流の必要性 (留学生と話ができる)
- ・ インターンシップの必要性 (企業人と話ができる)
- ・ ボランティア実習の必要性 (障害者・児童と話ができる)
- ・ 大学キャンパスの部活の必要性 (先輩・後輩と話ができる)

大学ではできるだけ多くの先生や職員と仲良くなり話をすることを勧めたい。地域社会のいろいろな職業の人、外国人留学生とも話す機会を作ることも大学の務めであると思う。次に、具体的な体験学習の方法について述べる。

- ① 企業実習であるインターンシップを通してビジネスの基本的なルールを学ぶこと、海外インターンシップができれば更に良い。
- ② ベンチャービジネスを研究して起業の成功要因・失敗要因が何かを学び、自らビジネスプ

ランを作成して、プロの起業家のレビューを受けること。また、問題を発見し解決する課題をグループで行い、起業家マインドを習得する。

- ③ 大学キャンパスで仲間と一緒に部活で頑張ることは人間形成にとって大事な事である。また、リーダーシップや協調性、“ハウレンソウ”（＝報告・連絡・相談）等、実社会でとても大事な営業センスを体得することができる。
- ④ ボランティア実習を通して、高齢化社会における福祉や介護の重要性について学ぶ。福祉は雇用のポテンシャルが大きく、今後大きなビジネス分野になると期待されている。地域社会の活性化に大きな影響を与える福祉と介護について勉強する必要がある。
- ⑤ 異文化国際交流は今後、飛躍的に発展が予想される東南アジア、特に上海を中心とする中国との海外インターンシップの実現が望まれる。

3) 人間力

これはなかなか説明が難しい。即戦力のスキルをもちインターンシップ等の体験学習もこなして、営業センスと起業家マインドを身につけたとしても、人間の幅や深みを会得することは一朝一夕にはできない。しかし、ビジネスに交渉はつきものであるから、お客との心の共感がなければ、ビジネスは失敗する。そこで、若い内に読書にふけり、生きることを考え、人生哲学を学ぶための修業体験をすることが必要になってくる。武田信玄の風林火山の例えの如く、不測の事態に動じず的確な判断処置ができるように若いときからの人生修行体験が望ましい。色々な修行体験があると思うが、学生社長など学生時代の起業体験なども大きな試練を受けるので、すばらしい修業体験の1つであろう。何もしないしていると何も変わらない。何度失敗してもいい、何か一生懸命やり続けることにより次の成功への何かが見えてくる筈である。変化に対応するサバイバル能力を身につけ、失敗を糧として成長することができる全天候型人材を育成するには、目的に合ったケース・バイ・ケースの体験学習を積み重ねていく必要がある。

6. 就職と人生を成功させるキーワード

カリキュラムが大学を変え、学生を変えと言っても過言ではない。学生にやる気を起こさせ、自分のために一生懸命に何かをGETしようという気持ちにさせる方法はないものであろうか。人間を変える教育、それも短時間で効果的に変えるにはどうすればよいかを考え続けていたが、図3に示す3つのキーワードが重要であると考えに到った。第1のキーワードは学生に「目標」をもたせることであり、第2は短期集中トレーニングを可能にする「スピード」である。

第3のキーワードは互いに良きライバルとして「競争」させる環境づくりである。

第1のキーワードである“目標設定”は学生に意欲を起こさせる原動力になるものである。

志望する企業に内定するという目標に向かって頑張るとか、パソコン検定の資格を取ることを目標にしたり、授業料免除やその他のインセンティブを目標にすることができる。

第2のキーワードは“スピード”である。すなわち、スピード授業で効果をあげることが大事である。これはパソコンなどの短期集中トレーニングを夜間・休日に行い実績をあげる。

第3のキーワードは“競争”である。お互いに競争させる環境を作り、いい意味でのライバル同士で成果を競わせることにより、緊迫感、緊張感を出させ、学習効果を高めるのである。でき

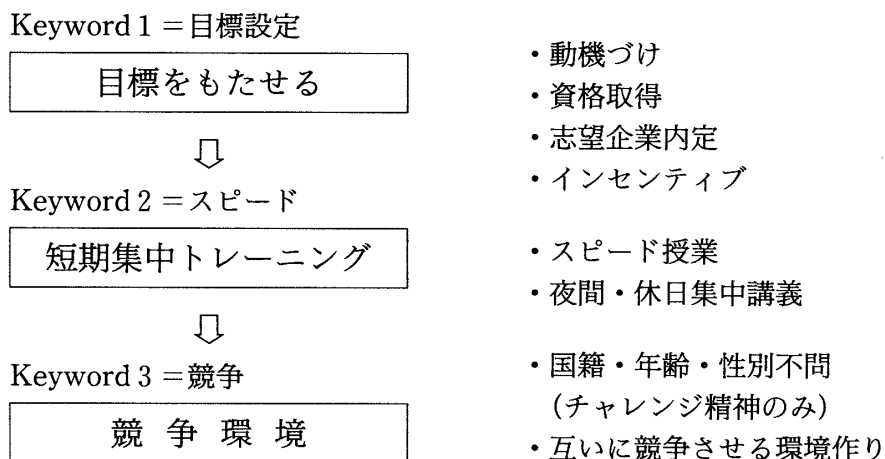


図3 就職と人生を成功させるキーワード

れば、中国や韓国のハングリーな若者たちを受講生に加えて、国際的な競争環境ができるとすばらしい。彼等はハングリー精神が旺盛であり、目標に対する努力を惜しまないからである。高い目標を掲げ、それを達成するため短期集中の努力をするハングリー精神を養成することが最重要課題である。そのためには良きライバルができる競争環境を提供することが最も効果的であると考える。

おわりに

最後に、学生を変え、大学を変えるのはカリキュラムである。大学生活の最後を飾る“就職”というイベントを成功裏に終わらせるには、効果的なカリキュラムを作成しなければならない。

カリキュラムの内容は図2を参考にして、①即戦力となる「活用できる知識」を習得できるカリキュラムであること、②「体験学習と部活」が十分にできること、③「一生懸命没頭できる何か素晴らしいもの」をもつように支援するカリキュラムであることが望ましい。それから、図1の「動機づけ」、「体験学習」、「資格取得」を重点課題としたカリキュラムづくりをするべきである。そうすれば、就職だけでなく人生の進路決定に大きな力となる。

カリキュラムが素晴らしい効果をあげるためには、図3に示す3つのキーワードである“目標”、“スピード”、“競争”を提供できる環境が学生にとって必要であることがわかった。クラーク博士は言った、“Boys be ambitious!”と。この“ambitious”を心に燃やし続ける若者たちをぜひ育てていきたいものである。

注

1. 石川公洋・富田達朗 大学生のレベルアップ戦略—就職から見た大学評価の分析—九州ルーテル学院大学紀要 VISIO No.29 pp.101-102 2002.7
2. 川成洋 大学崩壊 宝島社新書 pp.173-177 2000.6.24
3. 東京ガス都市生活研究所 人は見かけで選ばれる pp.18-25 2002.2.5